Tsukuba Psychological Research
2018, **56**, 43-57

役割期待が自己呈示行動における否定的感情に及ぼす影響

筑波大学大学院人間総合科学研究科　成田　恭代

筑波大学人間系　松井　　豊

The effects of role expectations on negative emotions derived from making self-presentations

Yasuyo Narita *(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)
Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study examines how self-presentations about role expectations exert negative influences on the presenter's emotions. Undergraduates ($n = 394$) were asked to imagine a situation in which they were expected to play a specific role (either maintaining a conversation or making a self-presentation in class) and to answer questions about the situation's self-presentation and attitudes concerning role expectations (sensitivity towards role expectations and fulfilling roles on a daily basis). The results revealed two main findings. (1) The main factors influencing negative emotions differed according to role expectation. In the conversation-maintaining situation, negative emotions were strongly influenced by sensitivity towards role expectations, while in the report-presentation situation, negative emotions were influenced by the self-presentations related to role expectations. (2) The relations between self-presentations and negative emotions differed according to both role content and familiarity with the observer. In the conversation-maintaining situation, when the presenter and the observer were familiar, the self-presentations elicited negative influences on emotions, but when they were unfamiliar, the self-presentations elicited positive influences emotions. In the report-presentation situation, irrespective of the level of familiarity between presenter and observer, self-presentations related to role expectations had a positive impact on emotions.

Key words: self-presentation, negative emotion, role expectation, familiarity, attitudes about role expectation

問　　題

人は多面的な自己像を持っており，時と場合に応じて相手に見せる自己の側面を意識的あるいは無意識的に選択し，社会生活を営んでいる。このような社会的行動は自己呈示（self-presentation）と呼ばれ，多くの研究者の注目を集めてきた（安藤，1994; 栗林，1995; Leary & Kowalski, 1990; Schlenker & Weigold, 1992）。Leary & Kowalski（1990）は，自己呈示の主な機能として「報酬の獲得と損失の回避」「自尊心の維持・高揚」「アイデンティティの確立」の３つを挙げているが，その第一と第二にあるように，効果的な自己呈示は対人関係の円滑化や進展に役立ち（谷口・清水，2017），呈示者の自尊心の向上につながる。

自己呈示が対人場面において重要な機能を担う反面で，自己呈示に伴って呈示者に対人不安（Schlenker & Leary, 1982）や羞恥（菅原，1998），不快感や憂鬱（水野，1994），自己嫌悪や辛さ・苦

連絡先：✉ymatsui@human.tsukuba.ac.jp（松井　豊）

しさ（成田・松井，2009）などの否定的感情が生じることが指摘されている。これらの自己呈示に伴う否定的感情が頻発することによって，適切な自己呈示が阻害され，対人関係の悪化や自尊心の低下などの負の影響が生じる可能性がある。

役割期待にあわせた自己呈示

自己呈示に影響を及ぼす要因の１つに，役割期待がある（Leary & Kowalski, 1990; 松本，2003）。役割期待とは，ある地位や状況にいる個人に対して，周囲の他者からしかるべき役割の実行が要求される現象である（後藤，1999）。

役割期待は，フォーマルな社会的地位や立場に基づく期待から，友人関係などのインフォーマルな関係における期待まで，個人の様々な立場や状況に基づいて生じる。また生じる役割期待も，呈示者の立場や呈示相手との関係性などによって異なる（高坂，2010; 下斗米，2000）。このような役割期待が生じる場面においては，呈示者は呈示相手から何らかの役割を求められており，その役割を遂行（役割にあわせた自己呈示）しなければと感じると考えられる。下斗米（2000）や黒川・吉田（2006）は，役割期待にあわせた自己呈示には，対人場面を円滑にし，対人関係を維持・向上させる機能があることを示している。

役割期待にあわせた自己呈示による影響　しかし，役割期待にあわせた自己呈示によって，負の影響が生じる場合もある。下斗米（2000）は，役割期待の遂行が友人関係の維持に必要とされる一方で，役割期待に対する遂行のズレが対人葛藤の生じる原因にもなることを示唆している。また千島・村上（2015）は，友人関係における固定された役割である“キャラ”による言動の制限などのデメリットによって，友人関係満足感が低下することを示している。さらに，職務の一環として適切な感情を感じるように自らを調整する感情労働（Zapf, 2002）の一側面である表層演技は，職務上ふさわしいとされる感情の呈示であり（Ashforth & Humphrey, 1993; Hochscheild, 1983），バーンアウトとの間に正の相関がある（関谷・湯川，2014）。また成田（2010）は，立場・役割にあわせた自己呈示が，女性において自己呈示時の否定的感情を促進することを示している。

以上より，役割期待にあわせた自己呈示は，対人関係や呈示者の心理状態に負の影響を与える可能性がある。本研究は，役割期待にあわせた自己呈示が，呈示者の心理状態に負の影響を与えるに至る過程を検討することを目的とする。

役割期待にあわせた自己呈示時の心理過程

本研究では，役割期待にあわせた自己呈示時の呈示者の心理過程を検討するにあたり，対人場面で呈示者が感じる状態的な役割期待の程度に注目する。

成田（2009; 2010）は，自己呈示の動機・理由の１つとして「自分はそのように行動すべき立場にいると思ったから」や「そのように行動するように期待されていると思ったから」などの，立場・役割に基づく側面を見出している。このような立場・役割に基づく動機による自己呈示時には，呈示者はその場の状況や立場に応じた何らかの役割を期待されていると感じていると考えられる。先行研究では，特定の友人（下斗米，2000）や仲間集団（黒川・吉田，2006）との関係において形成された，一定程度固定された役割期待の影響が主に検討されているが，個々の場面で生じる状態的な役割期待に関する知見は少ない。本研究は，呈示者が呈示相手から何らかの役割を期待されていると感じる程度を「役割期待感」と定義し，対人場面における状態的な役割期待感に注目することで，役割期待にあわせた自己呈示時の呈示者の心理過程を詳細に検討する。

さらに本研究では，役割期待にあわせた自己呈示時の心理過程について以下の仮説を立てる（Figure 1）。第一に，対人場面において呈示者が状態的な役割期待感を感じ，その役割を遂行（役割期待にあわせた自己呈示）しなければと感じる段階である。第二に，役割期待感に応じて具体的な自己呈示を行う，自己呈示行動の段階である。第三に，自己呈示行動の結果として否定的感情が生じる段階である。本研究では，役割期待にあわせた自己呈示時の心理過程を上記の３段階で捉えて，呈示者の心理状態に負の影響が生じる過程を検討する。

役割期待にあわせた自己呈示の関連要因１：状況要因

役割期待にあわせた自己呈示が呈示者の心理状態に負の影響を与える過程を検討するために，本研究では，対人場面における状況要因を操作して検討を行う。

役割期待の内容　状況要因の第一として，対人場面における役割期待の内容を操作する。Paulhus & Trapnell（2008）は，自己呈示の領域を，他者との関係性に関連するCommunionと，自律性や有能さに関連するAgencyに分類している。また，立場・役割にあわせた向社会的な自己呈示動機は，集団志向的な対人欲求と自己顕示的な対人欲求の両方と関連することが示されている（成田，2010）。さらに，自己呈示の関連分野である対人不安の研究において

は，対人不安の高まる場面として会話の停滞やレポート発表といった場面が挙げられているが（渡部，2000; ただし，渡部，2003による; 毛利・丹野，2007），前者は関係維持を期待される場面であり，後者は能力のアピールを求められる場面であると考えられる。

以上より本研究では，関係の維持に関わる会話維持場面と，能力のアピールに関わるレポート発表場面という２つの異なる役割期待が生じる場面を設定して，役割期待にあわせた自己呈示を検討する。

呈示相手との親しさ　状況要因の第二として，呈示相手との親しさを操作する。呈示者が求められる役割は，呈示相手との親しさによって異なる（髙坂，2010; 下斗米，2000）。下斗米（2000）では，友人関係における役割期待として娯楽性（場の雰囲気を和らげて相互作用の促進を図る役割）や力動性（課題や問題に積極的に関わる役割）などを検討しており，これら２つの役割は親しくない段階よりも親しい段階において役割期待が高く，遂行度も高かった。娯楽性は関係の維持に関連し，力動性は能力のアピールに関連すると考えられる。さらに同研究では，役割期待と遂行のズレは，娯楽性については相手と親しくなるほど対人葛藤の要因となりにくく，力動性については相手と親しくなるほど対人葛藤の要因となりやすいことを示唆している。すなわち，会話維持を期待される場面では，相手と親しくない場合は，期待に反して会話維持をしないことは対人関係や呈示者の心理状態に負の影響があると考えられる。また，能力のアピールを期待される場面では，相手と親しい場合は，期待に反して能力のアピールをしないことは対人関係や呈示者の心理状態に負の影響があると考えられる。

したがって，相手との親しさによる否定的感情への影響は次のように予測される。会話維持場面における役割期待にあわせた自己呈示行動は，相手と親しい場面では否定的感情を抑制し，親しくない場面では否定的感情を促進すると考えられる（予測1-1）。またレポート発表場面における役割期待にあわせた自己呈示行動は，相手と親しい場面では否定的感情を促進し，親しくない場面では否定的感情を抑制すると予測される（予測1-2）。

呈示相手の人数　第三の状況要因として，呈示相手の人数を操作する。黒川・吉田（2006）は，役割期待の遂行が集団内地位や関係満足度に及ぼす影響は，集団のサイズによって異なることを示唆している。また，笠置・大坊（2010）の実験では，呈示相手が１人の場合と複数の場合とで，呈示者の自己呈示行動が異なることが示されている。本研究においても，呈示相手が１人の場面と複数の場面とを設定し，検討を行う。

役割期待にあわせた自己呈示の関連要因２：呈示者の役割期待に関する態度

本研究では，役割期待にあわせた自己呈示の先行要因として，呈示者の役割期待に関する態度も取り上げる。

Schlenker & Leary（1982）の対人不安の自己呈示モデルでは，対人不安は自己呈示の動機づけの強さと自己呈示の成功確率とに規定されると理論化されている。同モデルを援用すると，役割期待を特性的に感じやすい場合には，自己呈示の動機づけが高まり，自己呈示行動が促進されるとともに，否定的感情が高まると予測される。また役割期待を日常的に遂行していれば，その場で期待される役割の遂行はより容易になり，自己呈示の成功確率が高まり，否定的感情が抑制されると考えられる。Vohs, Baumeister, & Ciarocco（2005）は，日常的にやり慣れていない自己呈示，すなわち，日常的に遂行していない役割の遂行をした後で呈示者の自己制御課題の成績が低下することを示している。したがって，役割期待を日常的に遂行しているほど，否定的感情は抑制されると予測される。

以上より本研究では，呈示者の実生活における役割期待の遂行の様子や役割期待の特性的な感じやすさなどの，呈示者の役割期待に関する態度を，役割期待にあわせた自己呈示の先行要因として検討する。呈示者の役割期待に関する態度が役割期待にあわせた自己呈示に与える影響は，以下のように予測される。役割期待を特性的に感じやすいほど，役割期待感が高まり，役割期待にあわせた自己呈示行動および否定的感情が促進されると予測される（予測２）。また，役割期待を日常的に遂行しているほど，否定的感情が抑制されると予測される（予測３）。

本研究の目的

以上より本研究では，役割期待にあわせた自己呈示に注目し，役割期待感と自己呈示行動および否定的感情との関連を検討することを目的とする。

検討に際しては，大学生にとって身近な役割期待の生じる場面であると考えられる会話維持場面とレポート発表場面との２つの場面を設定する。これら２つの場面について，呈示相手との親しさや呈示相手の人数といった状況要因を操作する。役割期待にあわせた自己呈示時の心理過程は，呈示者が役割期待感を感じる段階，役割期待にあわせた自己呈示行動の段階，否定的感情が生じる段階の３段階で捉え

る。さらにこの3段階の先行要因として，呈示者の役割期待に関する態度を取り上げる。本研究における検討モデルをFigure 1に示す。

先行研究に基づく予測　役割期待感と自己呈示行動および否定的感情との関連を検討するにあたり，先行研究の知見から導かれる予測は以下の3点にまとめられる。

予測1：役割期待にあわせた自己呈示行動が否定的感情に及ぼす影響は，役割期待の内容および呈示相手との親しさによって異なる。会話維持場面では，役割期待にあわせた自己呈示行動は，呈示相手と親しい場合は否定的感情を抑制し，呈示相手と親しくない場合は否定的感情を促進する（予測1-1）。レポート発表場面では，役割期待にあわせた自己呈示行動は，呈示相手と親しい場合には否定的感情を促進し，呈示相手と親しくない場合には否定的感情を抑制する（予測1-2）。

予測2：役割期待の特性的な感じやすさが高いほど，役割期待感が高まり，役割期待にあわせた自己呈示行動および否定的感情が促進される。

予測3：役割期待の日常的な遂行が高いほど，否定的感情は抑制される。

本研究では以上の3つの予測についての検討を通して，役割期待にあわせた自己呈示が呈示者の心理状態に負の影響を与えるに至る過程を検討する。

方　法[1,2)]

調査方法・回答者・調査時期・倫理的配慮

無記名の個別自記入方式による場面想定法質問紙調査で実施された。回答者は大学生394名（男性160名，女性233名，無回答1名。平均年齢20.55±1.39（18-27）歳）であった。調査時期は2010年10～11月であった。

調査は，筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て，倫理的な配慮を行った上で実施された。

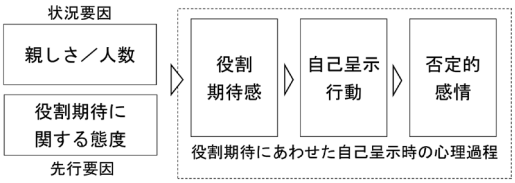

Figure 1.　本研究における検討モデル。

調査内容

質問紙では，会話維持場面とレポート発表場面の場面想定文を提示し，場面の想定を求めた。場面想定文は，両場面について呈示相手との親しさ（親しい／親しくない）と呈示相手の人数（1人／複数）を操作した4種類ずつを用意し（Table 1），それぞれ1種類を提示した。提示する場面想定文の組み合わせ及び提示順については，カウンターバランスを取った。

会話維持場面　会話維持場面の場面想定文1種類を提示し，場面の想定を求めた上で，以下の設問への回答を求めた。(a) 会話維持場面における役割期待感：想定した場面において，どの程度会話を維持しなければならないと思うかについて，「a. そう思

1）場面想定文の作成と妥当性の検討のために，大学生85名を対象に予備調査1を行った。場面想定文は，渡部（2000; ただし，渡部，2003による）の対人不安喚起場面の1つである「会話の停滞」を参考に会話維持場面の場面想定文を，「レポート発表」を参考にレポート発表場面の場面想定文を作成した。両場面について，役割期待の強さ（高／低），呈示相手との親しさ（親しい／親しくない），および呈示相手の人数（1人／複数）の3つの変数を操作して各8種類を作成した。調査の結果，全ての場面想定文について想定に無理がなく，呈示相手との親しさが正しく操作されていることが確認された。また，レポート発表場面・役割期待高条件において役割期待感の天井効果が生じている可能性が示唆されたため，予備調査2以降では，役割期待低条件の場面想定文（会話維持場面4種類・レポート発表場面4種類）を用いることとした（Table 1）。

2）自己呈示行動の行動選択肢を作成するために，大学生116名を対象に予備調査2を行った。予備調査1で作成した場面想定文を，会話維持場面とレポート発表場面について各1種類ずつ提示し，想定した場面において自分ならどのような行動をとるかについて，自由記述回答を最大5つまで求めた。調査の結果，会話維持場面について276件，レポート発表場面について215件の自由記述回答が得られた。得られた回答を，心理学を専攻する大学院生1名がKJ法を援用して分類し，心理学者が分類の妥当性を確認した。分類の結果，会話維持場面については11カテゴリーが得られ，そのうち回答率が3％以上であった8カテゴリーを本調査における自己呈示行動の行動選択肢として採用した（Table 2-1）。レポート発表場面については12カテゴリーが得られた。そのうち本研究の目的に合わない3カテゴリーを削除し，「発表相手を見る」についてはカテゴリーに含まれた回答の意味合いから「発表がよく伝わるように，発表相手の顔を見る」と「心配なので，発表相手の顔を見る」の2つの選択肢を作成した。さらに本研究の目的にあわせて「手を抜いて発表する」を追加し，合計11個の行動選択肢を採用した（Table 2-2）。

Table 1
会話維持場面およびレポート発表場面の場面想定文

	会話維持場面
【A- Ⅰ】 親しい × １人	ある日，あなたは図書館によって勉強していました。遅くなったので帰ろうと歩いていると，後ろから声をかけられました。偶然にも仲の良い友人１人が同じ図書館にいたようです。なりゆきで，その人と一緒に帰ることになりました。 しかししばらくすると，話が続かなくなり，２人とも黙ったまま歩き続けています。
【A- Ⅱ】 親しい × 複数	ある日，あなたは図書館によって勉強していました。遅くなったので帰ろうと歩いていると，後ろから声をかけられました。偶然にも仲の良い友人４～５人が同じ図書館にいたようです。なりゆきで，その人と一緒に帰ることになりました。 しかししばらくすると，話が続かなくなり，みんな黙ったまま歩き続けています。
【A- Ⅲ】 親しくない × １人	ある日，あなたは授業のグループワークで，初対面の人たちと一緒のグループになりました。 あなたは，授業の課題をするために，グループの人と図書館に調べ物に行きました。調べ物が終わった後で，グループのうちの１人となりゆきで一緒に帰ることになりました。 しかししばらくすると，話が続かなくなり，２人とも黙ったまま歩き続けています。
【A- Ⅳ】 親しくない × 複数	ある日，あなたは授業のグループワークで，初対面の人たちと一緒のグループになりました。 あなたは，授業の課題をするために，グループの人と図書館に調べ物に行きました。調べ物が終わった後で，グループ４～５人となりゆきで一緒に帰ることになりました。 しかししばらくすると，話が続かなくなり，みんな黙ったまま歩き続けています。
	レポート発表場面
【B- Ⅰ】 親しい × １人	あなたは，普段から親しくしている同じ学部の先生の授業を取っています。 その授業では，テストの代わりに先生に個別にレポートを発表することになっています。今日はその本番で，レポートを準備してきました。先生は，「失敗してもいいので，気楽に発表して下さいね」と言っています。 あなたは今，先生の前に立ち，発表を始めるところです。
【B- Ⅱ】 親しい × 複数	あなたは，普段から親しくしている同じ学部の先生の授業を取っています。 その授業では，順番に１人ずつ先生や受講生みんなの前でレポートを発表することになっています。今日はあなたの順番で，レポートを準備してきました。先生は，「失敗してもいいので，気楽に発表して下さいね」と言っています。 あなたは今，みんなの前に立ち，発表を始めるところです。
【B- Ⅲ】 親しくない × １人	あなたは，別の学部の知らない先生が担当する授業を取っています。 その授業では，テストの代わりに先生に個別にレポートを発表することになっています。今日はその本番で，レポートを準備してきました。先生は，「失敗してもいいので，気楽に発表して下さいね」と言っています。 あなたは今，先生の前に立ち，発表を始めるところです。
【B- Ⅳ】 親しくない × 複数	あなたは，別の学部の知らない先生が担当する授業を取っています。 その授業では，順番に１人ずつ先生や受講生みんなの前でレポートを発表することになっています。今日はあなたの順番で，レポートを準備してきました。先生は，「失敗してもいいので，気楽に発表して下さいね」と言っています。 あなたは今，みんなの前に立ち，発表を始めるところです。

う」から「e. まったくそう思わない」の５件法で回答を求めた。(b) 自己呈示行動の選択（多重回答）：想定した場面において自分がとると思う自己呈示行動について，多重回答方式で回答を求めた（Table 2-1)。(c) 最もとる可能性の高い自己呈示行動（単一回答）：多重回答で選択したなかで，最もとる可能性が高いと思う自己呈示行動について単一回答方式で回答を求めた。(d) 自己呈示に伴う否定的感情：単一回答で選択した行動を実際にとったと仮定した上で，そのときどのような気持ちになるかを測定するための設問である。独自作成の15項目であり，「落ち込み・不安」「緊張・動揺」「けん怠・苛立ち」の３側面からなる[3)]。項目を Table 3に示す。

3）自己呈示に伴う否定的感情に関する項目は，成田（2009）における自己呈示に伴う否定的感情尺度を，第一著者の未発表研究において改変した項目である。成田（2009）の自己呈示に伴う否定的感情尺度10項目に項目を追加し，より多面的な感情が測定できる30項目の尺度に改変した。追加項目は，寺崎・岸本・古賀（1992）の多面的感情尺度の下位側面である「抑鬱・不安」「敵意」「倦怠」「驚愕」や，菅原（1992）の羞恥の項目を参考に独自作成した。この自己呈示に伴う

Table 2-1
会話維持場面における自己呈示行動の選択率（多重回答）

自己呈示行動	度数	選択率
当たりさわりのない話題を出す	307	77.9%
相手にサークルや趣味等について質問してみる	222	56.3%
何とかして会話をつなぐ	189	48.0%
何もせずに黙っている	157	39.8%
自分のことについて話す	130	33.0%
携帯電話を見たり，景色を眺めたりなど，１人で何かをする	128	32.5%
「用事がある」「帰り道が違う」など，何か理由をつけてその場を離れる	45	11.4%

Table 2-2
レポート発表場面における自己呈示行動の選択率（多重回答）

自己呈示行動	度数	選択率
いつも通りに発表する	280	71.1%
笑顔を作る	156	39.6%
自信がなくて，上手く発表できなくなる	124	31.5%
発表がよく伝わるように，発表相手の顔を見る	120	30.5%
心配なので，発表相手の顔を見る	82	20.8%
「自信がない」「緊張する」などとわざと口にする	81	20.6%
堂々と上手く発表する	73	18.5%
早口にしたりして，早く終わらせようとする	51	12.9%
おもしろおかしく発表する	39	9.9%
手を抜いて発表する	15	3.8%

それぞれの項目について「5. 非常にあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」の５件法で回答を求めた。

レポート発表場面　レポート発表場面の場面想定文１種類を提示し，場面の想定を求めた上で，以下の設問への回答を求めた。(a) レポート発表場面における役割期待感：想定した場面において，どの程度優秀な発表をしなければならないと思うかについて，会話維持場面と同様の５件法で回答を求めた。(b) 自己呈示行動の選択（多重回答）：想定した場面において自分がとると思う自己呈示行動について，多重回答方式で回答を求めた（Table 2-2）。(c) 最もとる可能性の高い自己呈示行動（単一回答）：多重回答で選択したなかで，最もとる可能性が高いと思う自己呈示行動について単一回答方式で回答を求めた。(d) 自己呈示に伴う否定的感情：単一回答で選択した行動を実際にとったと仮定した上で，そのときどのような気持ちになるかについて会話維持場面と同様の15項目に回答を求めた（５件法）。

Table 3
自己呈示に伴う否定的感情の項目

落ち込み・不安	
自分が情けない人間に感じられる	
自信がない	
落ち込んだ	
自分のことが嫌だと思う	
不安な	
緊張・動揺	けん怠・苛立ち
びっくりした	退屈な
驚いた	だるい
はっとした	疲れる
照れくさい	つまらない
動揺した	無気力な

役割期待に関する態度　(a) 会話維持役割に関す

否定的感情尺度30項目について，因子分析の結果「落ち込み・不安」「緊張・動揺」「けん怠・苛立ち」の３因子が得られ，α係数は .80～.89と十分な内的一貫性が確認された。なお同研究における別の解析を，日本社会心理学会第51回大会において発表している。本研究で使用した15項目は，未発表研究における自己呈示に伴う否定的感情の３側面それぞれから，因子負荷量が高く，かつ項目の表現が重複しない項目を各５項目ずつ抜粋し，場面想定法での使用にあわせて現在時制に修正したものである。

る態度：回答者の実生活における会話維持役割の様子や，会話維持役割の特性的な感じやすさを測定するための項目である。下斗米（2000）の役割行動期待尺度の下位側面「娯楽性」や，岩男・堀（1998）の発話傾向尺度の下位側面「一般的社会的発話傾向」，畑中（2003）の発言抑制尺度の下位側面「規範・状況」を参考に，12項目を独自作成した（５件法）。(b）有能な学生役割に関する態度：回答者の実生活における有能な学生役割の様子や，有能な学生役割の特性的な感じやすさを測定するための項目である。山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度や，小塩（1999）の NPI-S の下位側面「優越感・有能感」，桜井・大谷（1997）の自己志向的完全主義尺度の下位側面「失敗を過度に気にする傾向」を参考に，12項目を独自作成した（５件法）。

なお，質問紙上では上記以外の項目にも回答を求めたが，以降の分析には含めなかったので記述を省略する。

結　　果

解析手順

解析は以下の手順で行う。まず，役割期待にあわせた自己呈示行動について，多重回答の回答をもとに役割期待にあわせた自己呈示行動の構造を解析し，単一回答の回答に基づいて群設定を行う。次に，自己呈示に伴う否定的感情や役割期待感，役割期待に関する態度の諸変数の尺度構成を行う。最後に，役割期待に関する態度や役割期待感と自己呈示行動および否定的感情との関連を検討するために，会話維持場面とレポート発表場面それぞれについてパス解析を行う。

役割期待にあわせた自己呈示行動の構造

自己呈示行動の構造の解析　各場面における自己呈示行動の選択率を Table 2-1，2-2に示す。各場面における自己呈示行動の構造を分析するために，数量化理論Ⅲ類（以下数量化Ⅲ類）による解析を行った。多重回答において選択率が10％以上であった自己呈示行動について，それぞれ選択・非選択の２カテゴリー，計14カテゴリーを解析に投入した（Figure 2-1，2-2）。解析の結果，会話維持場面における自己呈示行動については「会話維持行動」と「会話回避行動」の２カテゴリーが得られた。また，レポート発表場面における自己呈示行動については「優秀な発表」「いつも通りの発表」「自信のない発表」の３カテゴリーが得られた。

群設定　数量化Ⅲ類で得られたカテゴリーをもとに，自己呈示行動（単一回答）の回答による群設定を行った。会話維持場面においては，自己呈示行動（単一回答）において「会話維持行動」に含まれる自己呈示行動を選択した回答者を会話維持行動群とし，「会話回避行動」に含まれる自己呈示行動を選択した回答者を会話回避行動群とした。レポート発表場面においては，自己呈示行動（単一回答）において「優秀な発表」に含まれる自己呈示行動を選択した回答者を優秀な発表群とし，「いつも通りの発表」に含まれる自己呈示行動を選択した回答者をいつも通りの発表群とし，「自信のない発表」に含まれる自己呈示行動を選択した回答者を自信のない発表群とした。

尺度構成

自己呈示に伴う否定的感情　自己呈示に伴う否定的感情に関する15項目については，会話維持場面とレポート発表場面それぞれについて，下位側面毎に一次元性を確認するために主成分分析を行った。分析の結果，両場面ともに全ての下位側面において全項目が第１主成分に .40以上の高い付加を示した。α係数は，会話維持場面においては「落ち込み・不

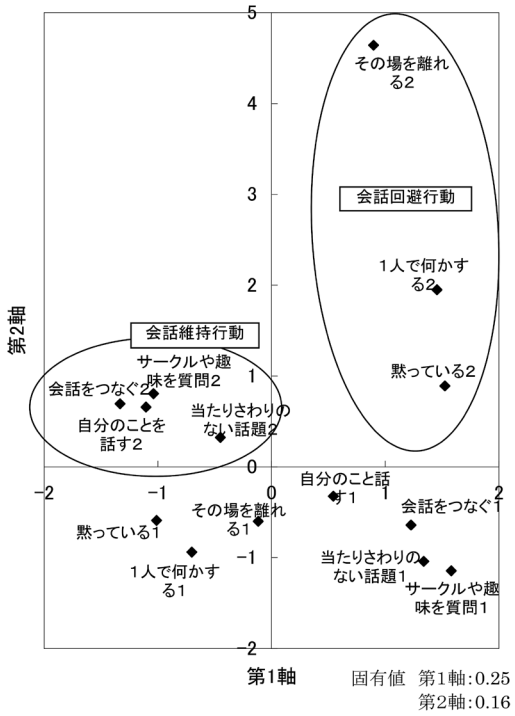

Figure 2-1.　会話維持場面における自己呈示行動の数量化Ⅲ類結果。
１＝「非選択」　２＝「選択」を意味する。

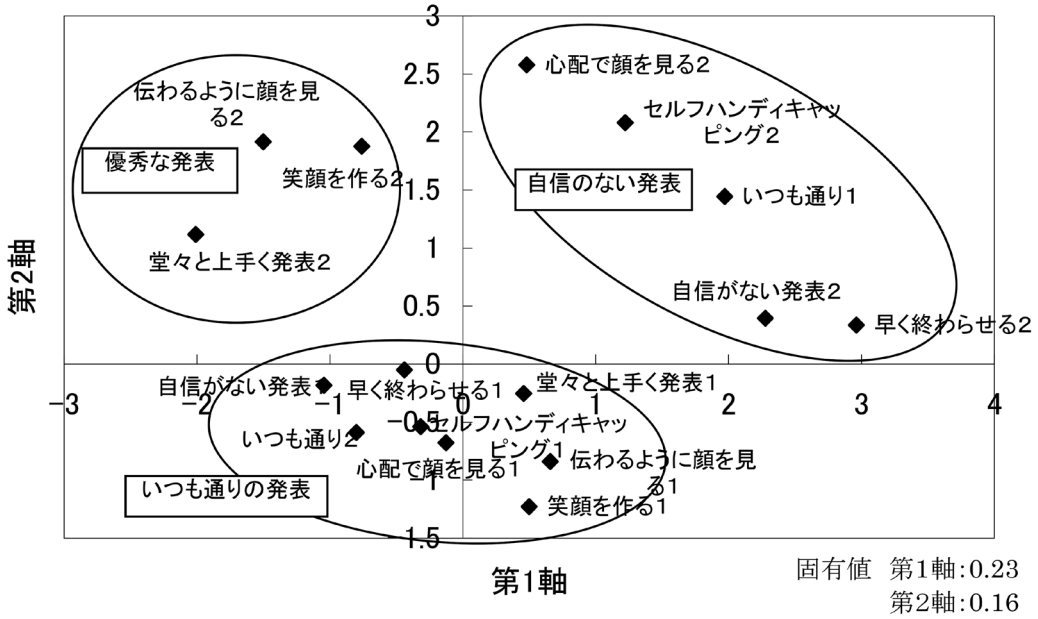

Figure 2-2.　レポート発表場面における自己呈示行動の数量化Ⅲ類結果。
1＝「非選択」　2＝「選択」を意味する。

安（α＝.89）」「緊張・動揺（α＝.78）」「けん怠・苛立ち（α＝.86）」であり，レポート発表場面において「落ち込み・不安（α＝.89）」「緊張・動揺（α＝.72）」「けん怠・苛立ち（α＝.84）」と，いずれの場面においても全ての下位側面で十分な内的一貫性があることが確認された。項目得点の平均値を算出し，尺度得点とした。

役割期待感の得点化　役割期待感1項目について，会話維持場面とレポート発表場面それぞれについて，5点（「a. そう思う」）～1点（「e. まったくそう思わない」）に得点化した。以降，会話維持場面における役割期待感得点を「会話維持役割期待感」とし，レポート発表場面における役割期待感得点を「有能な学生役割期待感」として記述する。会話維持役割期待感の平均値は3.18～3.88であり，有能な学生役割期待感の平均値は3.97～4.28であった。

役割期待に関する態度　独自作成した会話維持役割に関する態度の12項目について，因子分析（主成分解・プロマックス回転）を行った結果2因子が抽出された。2つの因子に.40以上の負荷を示した1項目を除外し，再度因子分析（主成分解・プロマックス回転）を行った（Table 4-1）。その結果，各因子は「日常的な会話維持役割の遂行」「会話維持役割期待感の感じやすさ」であると解釈された。

独自作成した優秀な学生役割に関する態度の12項目について，因子分析（主成分解・プロマックス回転）を行った。回転前固有値の推移（4.52，1.96，1.03，0.82）および解釈可能性から2因子解を選択し，再度因子分析（主成分解・プロマックス回転・2因子指定）を行った（Table 4-2）。その結果，各因子は「有能な学生役割の遂行」「有能な学生役割期待感の感じやすさ」因子であると解釈された。

会話維持役割に関する態度と優秀な学生役割に関する態度について，因子ごとに平均値を算出し尺度得点とした。

役割期待に関する態度や役割期待感と自己呈示行動および否定的感情との関連

役割期待に関する態度や役割期待感と自己呈示行動および否定的感情との関連を明らかにするために，パス解析を行った。パス解析は会話維持場面とレポート発表場面それぞれについて，呈示相手と親しい場面と親しくない場面に分けて行った[4)]。パス

4）パス解析に先立ち，会話維持場面とレポート発表場面それぞれについて，呈示相手との親しさ（親しい／親しくない）と，呈示相手の人数（1人／複数）とを独立変数とし，役割期待感を従属変数とする分散分析を行った。その結果，会話維持場面・レポート発表場面ともに，親しさの主効果が見られ，人数の主効果および交互作用は見られなかった（会話維持場面…呈示相手との親しさ：$F(1,389)=21.855$, $p<.001$; 呈示相手

Table 4-1
会話維持役割に関する態度の因子分析結果（主成分解・プロマックス回転）

No.	項目	因子 1	因子 2	h^2	*M*	*SD*
因子 1：日常的な会話維持役割の遂行　α＝.88						
4	会話の主導権を握ることが多い	**.85**	−.07	.69	2.93	1.02
12	周りの人は，自分のことをよくしゃべる人間だと思っている	**.82**	.02	.69	2.94	1.19
9	友達の中では，会話の中心人物と思われている	**.81**	.11	.74	2.44	1.05
6	「話が面白い」とよく言われる	**.80**	−.13	.58	2.81	1.08
3	友達に，冗談などで話を盛り上げることを，しばしば期待される	**.76**	.02	.59	2.86	1.16
1	人と一緒にいるときは，よくしゃべる方だ	**.73**	.09	.59	3.43	0.97
7	人と話をするのが好きだ	**.56**	−.02	.31	3.83	0.90
因子 2：会話維持役割期待感の感じやすさ　α＝.85						
8	会話中に場が静かになってくると，話そうと焦ってしまう	−.04	**.88**	.75	3.05	1.17
5	話が途切れないように気を遣ってしまう	−.03	**.86**	.73	3.36	1.10
2	会話中の沈黙に耐えられないと思うことが多い	−.04	**.86**	.72	2.97	1.18
11	友人との会話では自分が積極的にしゃべらなければと，しばしば思う	.11	**.73**	.60	2.78	1.13
	固有値	4.51	3.39			
	因子間相関	.40				
削除した項目						
10	会話が途切れた時は，自分から話題を振る					

Table 4-2
有能な学生役割に関する態度の因子分析結果（主成分解・プロマックス回転）

No.	項目	因子 1	因子 2	h^2	*M*	*SD*
因子 1：日常的な有能な学生役割の遂行　α＝.82						
10	自分はけっこう要領がいい	**.84**	−.34	.59	2.47	1.18
1	自分はそれなりに能力のある人間だと思う	**.78**	−.20	.53	2.87	1.03
12	「頭がいいね」と言われることが多い	**.71**	.04	.53	2.77	1.06
4	レポート発表は得意な方だ	**.70**	−.04	.47	2.25	1.03
3	周りの人は，わたしのことをできるやつだと思っている	**.68**	.22	.62	2.79	1.06
9	大学では，有能な人間だと思われている	**.66**	.28	.66	2.33	0.95
7	授業の課題は人並み以上にできると思う	**.63**	.23	.56	2.75	0.90
因子 2：有能な学生役割期待感の感じやすさ　α＝.76						
5	授業の課題などは，しっかりこなさなければいけないと思う	−.14	**.87**	.68	3.55	1.10
6	友達はわたしを，授業や課題にしっかり取り組む人だと思っている	.11	**.75**	.64	3.02	1.15
2	レポート課題等を手抜きできないほうだ	.03	**.74**	.56	2.89	1.17
8	人前ではいいところを見せなければと気張ってしまう	.01	**.60**	.37	3.38	1.07
11	人の期待を裏切るのは，できるだけ避けたい	−.14	**.56**	.27	4.04	0.87
	固有値	4.05	3.40			
	因子間相関	.39				

の人数：$F(1,389)=1.514$, *n.s.*／レポート発表場面…呈示相手との親しさ：$F(1,388)=4.672$, $p<.05$; 呈示相手の人数：$F(1,388)=.035$, *n.s.*）。したがって，呈示相手の人数による役割期待感への影響は小さいと判断し，パス解析では呈示相手と親しい場面と呈示相手と親しくない場面とについて検討することとした。

解析では，変数を 4 水準に分け，各水準より上位の変数を説明変数に取る重回帰分析を繰り返し行った。重回帰分析では変数増加法を用い，投入された変数の標準化偏回帰係数の有意性 5 %水準で変数の投入を打ち切った。

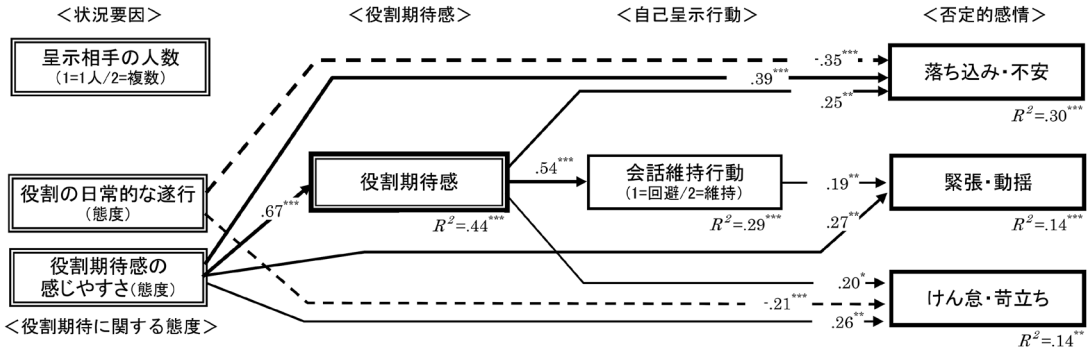

Figure 3-1.　会話維持場面（呈示相手と親しい場面（A- Ⅰ・A- Ⅱ））におけるパス解析結果（$n=176$）。
$^{***}p<.001$;　$^{**}p<.01$;　$^{*}p<.05$ 数字は標準化偏回帰係数を示す。破線は負のパスを示す。

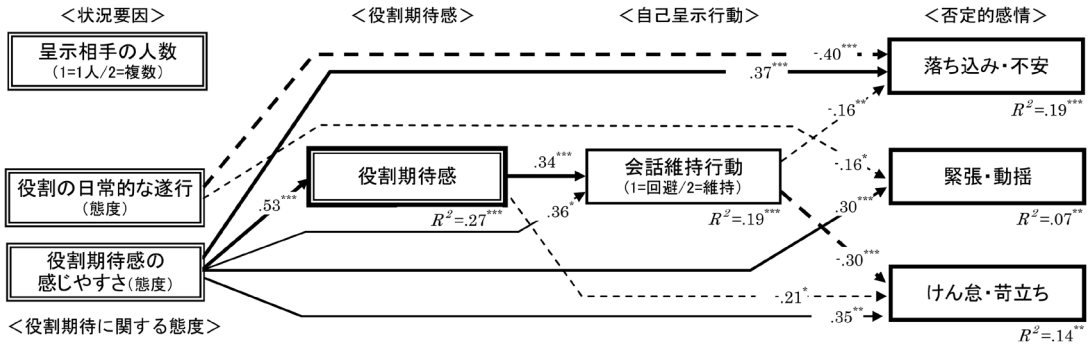

Figure 3-2.　会話維持場面（呈示相手と親しくない場面（A- Ⅲ・A- Ⅳ））におけるパス解析結果（$n=178$）。
$^{***}p<.001$;　$^{**}p<.01$;　$^{*}p<.05$ 数字は標準化偏回帰係数を示す。破線は負のパスを示す。

会話維持場面におけるパス解析　第1水準は，呈示相手の人数（1人条件＝1，複数条件＝2）および会話維持役割期待に関する態度の2変数（「会話維持役割の日常的な遂行」「会話維持役割期待感の感じやすさ」）であった。第2水準は，会話維持役割期待感であった。第3水準は，自己呈示行動（単一回答）の回答による2群を変数として投入した（会話維持行動群＝2，会話回避行動群＝1）。第4水準は，自己呈示に伴う否定的感情であった。

解析結果をFigure 3-1，3-2に示す。なおパス解析では，解析に投入した全ての項目に回答した354名（男性145名，女性209名）を解析対象とした。

解析の結果，親しい場面と親しくない場面のいずれにおいても，役割期待感の感じやすさが，役割期待感を通して会話維持行動を促進していた。

役割期待の日常的な遂行は，落ち込み・不安（両場面共通）や，けん怠・苛立ち（親しい場面）などの否定的感情を抑制していた。その一方で，役割期待感の感じやすさは，いずれの場面においても，否定的感情の全ての側面を促進していた。

会話維持行動と否定的感情との関連は，呈示相手との親しさによって異なっていた。呈示相手と親しい場面では，会話維持行動は緊張・動揺という否定的感情を促進していた。しかし呈示相手と親しくない場面では，会話維持行動は落ち込み・不安やけん怠・苛立ちといった否定的感情を抑制していた。

役割期待感と否定的感情との関連も，呈示相手との親しさによって異なっていた。呈示相手と親しい場面では，役割期待感は落ち込み・不安やけん怠・苛立ちを直接促進していた。加えて役割期待感は，会話維持行動を通して緊張・動揺を間接的に促進していた。しかし呈示相手と親しくない場面においては，役割期待感はけん怠・苛立ちを直接抑制し，また自己呈示行動を通して落ち込み・不安やけん怠・苛立ちを間接的に抑制していた。

レポート発表場面におけるパス解析　レポート発

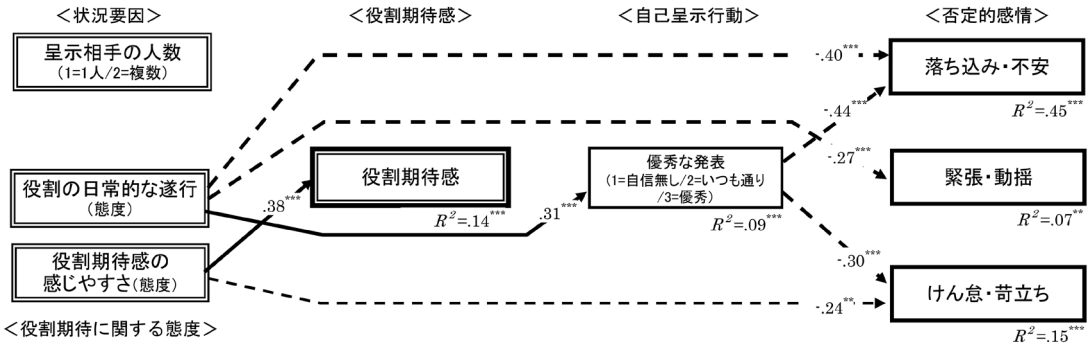

Figure 4-1.　レポート発表場面（呈示相手と親しい場面（B- Ⅰ・B- Ⅱ））におけるパス解析結果（n＝163）。
$^{***}p$＜.001;　$^{**}p$＜.01;　$^{*}p$＜.05 数字は標準化偏回帰係数を示す。破線は負のパスを示す。

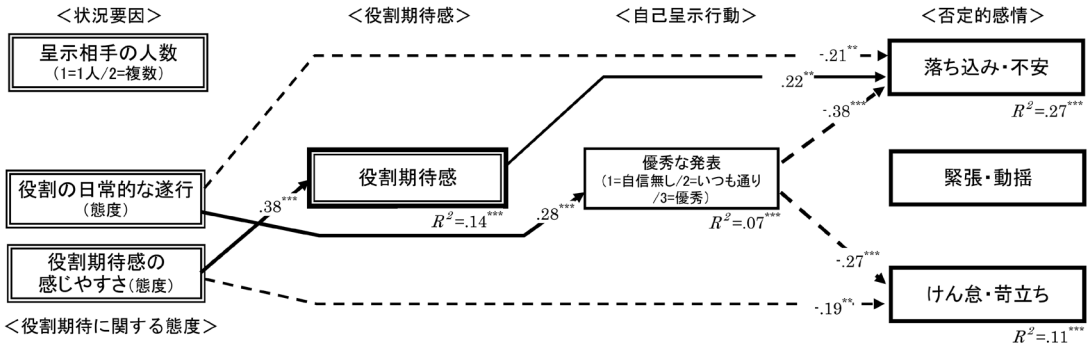

Figure 4-2.　レポート発表場面（呈示相手と親しくない場面（B- Ⅲ・B- Ⅳ））におけるパス解析結果（n＝179）。
$^{***}p$＜.001;　$^{**}p$＜.01;　$^{*}p$＜.05 数字は標準化偏回帰係数を示す。破線は負のパスを示す。

表場面についても同様にパス解析を行った。第１水準は，呈示相手の人数（１人条件＝1，複数条件＝2）および有能な学生役割期待に関する態度の２変数（「有能な学生役割の日常的な遂行」「有能な学生役割期待感の感じやすさ」）であった。第２水準は，有能な学生役割期待感であった。第３水準は，自己呈示行動（単一回答）の回答による３群を変数として投入した（優秀な発表群＝3，いつも通りの発表群＝2，自信の無い発表群＝1）。第４水準は，自己呈示に伴う否定的感情であった。

解析結果を Figure 4-1，4-2に示す。レポート発表場面についても，解析に投入した全ての項目に回答した342名（男性138名，女性204名）を解析対象とした。

解析の結果，役割期待感の感じやすさは，いずれの場面においても役割期待感を促進していた。しかし，役割期待感の感じやすさが役割期待感を介して優秀な発表を促進する間接効果は，見られなかった。その一方で，役割の日常的な遂行が，いずれの場面においても優秀な発表を直接促進していた。

役割の日常的な遂行は，落ち込み・不安（両場面共通）や緊張・動揺（親しい場面），けん怠・苛立ち（両場面共通）といった否定的感情を，直接的あるいは間接的に抑制していた。また，役割期待感の感じやすさは，いずれの場面においてもけん怠・苛立ちを抑制していたが，呈示相手と親しくない場面においては，役割期待感を通して落ち込み・不安を間接的に促進していた。

優秀な発表と否定的感情との関連については，両場面で共通した特徴が見られた。優秀な発表は，いずれの場面においても，落ち込み・不安やけん怠・苛立ちなどの否定的感情を抑制していた。

呈示相手の人数による有意な影響は見られなかった。

考　察

役割期待に関する態度や役割期待感と自己呈示行動および否定的感情との関連

役割期待に関する態度や役割期待感と，自己呈示行動および否定的感情との関連を明らかにするために，会話維持場面とレポート発表場面それぞれについてパス解析を行った。以下，各場面におけるパス解析の結果について考察する。

会話維持場面に関する考察　会話維持場面においては，役割期待感の感じやすさが，役割期待感を通して，会話を維持する自己呈示行動を間接的に促進していた。したがって，関係維持に寄与する会話維持場面では，役割期待感を特性的に感じやすいほど状態的な役割期待感も高くなりやすく，その結果として会話を維持する自己呈示行動が選択されやすいことが明らかになった。この結果は予測２と一致していた。

しかし，自己呈示行動が否定的感情に与える影響は，呈示相手との親しさによって異なっていた。親しい相手に対しては，役割期待にあわせて会話を維持するほど緊張・動揺という否定的感情が促進され，親しくない相手に対しては役割期待にあわせて会話を維持するほど，落ち込み・不安やけん怠・苛立ちといった否定的感情が抑制されていた。これは予測1-1に反する結果であった。親しい相手との場面において役割期待にあわせて会話維持をすることは，本来気楽で会話が弾むはずの親しい相手との会話が停滞し，普段とは異なる会話を維持する努力をすることで緊張や動揺が生じたものと考えられる。一方呈示相手と親しくない場合には，会話が停滞することそのものが気詰まりであるため，役割期待にあわせて会話を維持することで，そのような不安やけん怠を感じる状況を改善できるためであると考えられる。下斗米（2000）では，娯楽性の役割は，相手と親しいほど役割期待と遂行とのズレが対人葛藤の原因となりにくいことが示されていた。同研究では呈示相手から見た役割期待と遂行のズレと対人葛藤との関連を検討していたため，呈示者本人の心理状態への影響を検討した本研究では，下斗米（2000）とは異なる結果が得られたものと推察される。

また，役割期待の日常的な遂行は否定的感情を抑制する方向に，また役割期待感の感じやすさは否定的感情を促進する方向に，それぞれ働くことが明らかになった。これは，予測２および予測３を支持する結果であった。特に役割期待感の感じやすさは，パス解析においては，役割期待感や自己呈示行動，否定的感情に対して強い影響を与えていた。したがって，関係維持に寄与する会話維持場面においては，役割期待感の特性的な感じやすさが，自己呈示行動や否定的感情に対して強い影響を与えていることが明らかになった。

レポート発表場面に関する考察　レポート発表場面においては，役割期待感の特性的な感じやすさは状態的な役割期待感を促進するが，役割期待感を介した自己呈示行動への間接効果は見られなかった。これは予測２と一部異なる結果であった。本研究のレポート発表場面では，大学の授業の課題としてレポート発表を求められる場面を設定した。このような場面において優秀な発表をすることは，呈示者の役割期待感の特性的な感じやすさや状態的な役割期待感の高低に関わらず，全ての呈示者にとって達成すべき課題であるため，役割期待感の特性的な感じやすさや状態的な役割期待感が自己呈示行動に影響を及ぼさなかったものと考えられる。

その一方で，優秀な発表という自己呈示行動は，役割の日常的な遂行によって促進されていた。この結果は予測３と一致していた。これは，優秀な発表を日常的に行っていれば，優秀な発表という自己呈示行動の難易度が低くなり，想定した場面においてもより優秀な発表ができるためであると考えられる。

以上より能力のアピールに寄与するレポート発表場面においては，役割期待にあわせた優秀な発表は，役割期待感の特性的な感じやすさや状態的な役割期待感ではなく，有能な学生役割を日常的に遂行しているかどうかによって規定されることが明らかになった。

また，自己呈示行動が否定的感情に与える影響については，呈示相手との親しさによる違いは見られなかった。したがって，レポート発表場面においては，自己呈示行動が否定的感情に与える影響は呈示相手との親しさを問わず一貫しており，役割期待にあわせて優秀な発表をするほど否定的感情が抑制されることが明らかになった。この結果は予測1-2に反する結果であった。本研究のレポート発表場面における呈示相手は授業の担当教員であり，求められる役割は授業の課題としてレポート発表をすることであった。このような場面においては発表を成功させること自体がその場における課題であり，呈示相手からの評価や自尊感情を向上させることに繋がる。そのため，優秀な発表をすることで落ち込み・不安やけん怠・苛立ちなどの否定的感情が軽減されるという効果に対して，呈示相手との親しさは関連しなかったと考えられる。

さらに，両場面のパス解析において，否定的感情

の下位側面に有意な影響を与えていたパスの標準化偏回帰係数の値を比較したところ，レポート発表場面においては自己呈示行動が否定的感情に対して強い影響を与えていた。したがって，能力のアピールに関連するレポート発表場面においては，役割期待に合わせて優秀な発表をするかどうかが，否定的感情に強い影響を与えることが明らかになった。

本研究の結論

以上より，役割期待に関する態度や役割期待感と自己呈示行動および否定的感情との関連について，本研究で得られた知見は以下の２点にまとめられる。

第一に，否定的感情に影響する主たる要因は役割期待の内容によって異なっていた。関係維持が求められる場面においては，役割期待の特性的な感じやすさが，状態的な役割期待感や自己呈示行動および否定的感情に強く影響する要因であった。また，能力のアピールを求められる場面においては，役割期待にあわせた自己呈示行動そのものが否定的感情に強く影響する要因であった。

第二に，役割期待にあわせた自己呈示行動が否定的感情に及ぼす影響は，対人場面で期待される役割の内容と呈示相手との親しさによって異なっていた。関係維持を求められる場面においては，役割期待にあわせた自己呈示行動が否定的感情に与える影響は呈示相手との親しさによって異なっていた。呈示相手と親しい場合は役割期待にあわせて会話維持をするほど否定的感情が促進され，親しくない場合は役割期待にあわせて会話維持をするほど否定的感情が軽減された。一方，能力のアピールを求められる場面においては，役割期待にあわせた自己呈示行動が否定的感情に及ぼす影響は呈示相手との親しさを問わず一貫しており，役割期待にあわせて能力をアピールするほど否定的感情が軽減された。

先行研究における位置づけ

役割期待にあわせた自己呈示は，対人場面を円滑にし，対人関係を維持・向上させる機能があると同時に，対人関係や呈示者の心理状態に負の影響を与える可能性があることが先行研究から示唆されていた（千島・村上，2015; 黒川・吉田，2006; 下斗米，2000）。このような負の影響によって，役割期待にあわせた自己呈示が阻害され，対人関係の悪化や自尊心の低下につながる可能性があった。

本研究では，個々の場面で生じる状態的な役割期待感に注目し，役割期待にあわせた自己呈示時の呈示者の心理過程を３段階に分けて検討した。また，役割期待にあわせた自己呈示の先行要因として，呈示者の役割期待に関する態度を検討に含めた。これらによって，役割期待に関する特性的な要因や当該場面における状態的な役割期待感が，自己呈示行動や否定的感情にあたえる影響について，より精緻な知見を得ることができた。また本研究では，役割期待の内容や呈示相手との親しさなどの状況変数を操作して検討したことで，役割期待にあわせた自己呈示行動によって否定的感情が促進される場合と抑制される場合とを分離することができた。

以上のように本研究では，役割期待にあわせた自己呈示時に否定的感情が生じるメカニズムについて，精緻な知見を得ることができた。これによって本研究は，役割期待にあわせた自己呈示時に生じる否定的感情を軽減し，役割期待にあわせた自己呈示が持つ有益な機能を強める方策を考察する上で，新たな示唆を提供できたと言える。

本研究の課題

最後に本研究の課題を述べる。第一の課題は，役割期待感や自己呈示行動と否定的感情との関連について，直線的な関連のみの検討に留まった点である。役割期待にあわせた自己呈示は，対人関係の進展や集団内地位を向上させる機能を持つ（黒川・吉田，2006; 下斗米，2000）。本研究では，役割期待にあわせた自己呈示行動が否定的感情を促進する場合があることが示されたが，役割期待にあわせた自己呈示をしないことによって対人関係の悪化を招く可能性も否定できない。したがって，今後は役割期待にあわせた自己呈示と否定的感情との関連について，曲線的な関連も想定し，役割期待にどの程度あわせて自己呈示をするのが呈示者の心理状態や対人関係に最も有益なのか検討する必要がある。

第二の課題は，本研究の検討が場面想定法による質問紙調査に限られた点である。呈示相手の人数が役割期待にあわせた自己呈示に影響を与えることが先行研究から示唆されていたが，本研究では呈示相手の人数による影響は見られなかった。先行研究では，呈示相手の人数を操作した実験（笠置・大坊，2010）や実生活における対人関係について回答を求める調査（黒川・吉田，2006）によって，呈示相手の人数による影響が示されていた。これらの検討方法では，呈示者は実際に複数の相手に対して自己呈示をしたり，実生活における複数の相手との関係を想起するため，呈示相手の人数の影響が見られたと考えられる。一方本研究では，架空の対人場面について想定を求めたため，呈示相手が１名の場合と複数の場合とで違いが見られなかった可能性がある。

したがって，実験や実生活における役割期待にあわせた自己呈示に関する調査もあわせて行い，呈示相手の人数による影響を精査する必要がある。

第三の課題は，本研究の検討範囲が大学生の友人関係や大学の授業の場面に限定されていた点である。役割期待は，仕事上の立場などのフォーマルな場面によっても生じると考えられる。今後は仕事などの場面における役割期待についても検討し，役割期待と自己呈示行動および否定的感情との関連についてさらに議論を深める必要がある。

引用文献

安藤清志（1994）．見せる自分／見せない自分――自己呈示の社会心理学 セレクション社会心理学1 サイエンス社

Ashforth, B. E., & Humphrey, R. H. (1993). Emotional labor in service roles: The influence of identity. *Academy of Management Review*, *18*, 88-115.

千島雄太・村上達也（2015）．現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連――“キャラ”に対する考え方を中心に 青年心理学研究，*26*，129-146.

後藤将之（1999）．役割期待 心理学辞典（p.851）有斐閣

畑中美穂（2003）．会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響　心理学研究，*74*，95-103.

Hochscheild, A. R. (1983). *The managed heart*. Berkley: University of California Press.（石黒准・室伏亜希（訳）（2000）．管理される心　世界思想社）

岩男征樹・堀　洋道（1998）．大人ではどんな人が独り言をよくいうのか？ 筑波大学心理学研究，*20*，143-156.

笠置　遊・大坊郁夫（2010）．複数観衆問題への対処行動としての補償的自己高揚呈示 心理学研究，*81*，26-34.

髙坂康雅（2010）．大学生における同性友人，異性友人，恋人に対する期待の比較　パーソナリティ研究，*18*，140-151.

栗林克匡（1995）．自己呈示：用語の区別と分類 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），*42*，107-114.

黒川雅幸・吉田俊和（2006）．個人―集団間の役割期待遂行度が仲間関係満足度に及ぼす影響　実験社会心理学研究，*45*，111-121.

Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1990). Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, *107*, 34-47.

松本芳之（2003）．役割期待が自己呈示行動に及ぼす影響：性役割期待と成功回避　早稲田大学大学院文学研究科紀要　第1分冊，*48*，39-52.

水野邦夫（1994）．意に反した行動をした後の態度及び感情状態の変化 性格心理学研究，*2*，38-46.

毛利伊吹・丹野義彦（2007）．状況別対人不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 健康心理学研究，*14*，23-31.

成田恭代（2009）．否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程　日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会発表論文集，312-313.

成田恭代（2010）．自己呈示の動機・理由と呈示者の性格特性および呈示相手に示したい印象との関連　日本社会心理学会第51回大会発表論文集，380-381.

成田恭代・松井　豊（2009）．自己呈示に伴う否定的意識の規定因の探索的検討 対人社会心理学研究，*9*，33-44.

小塩真司（1999）．高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関係 性格心理学研究，*8*，1-11.

Paulhus, D. L., & Trapnell, P. D. (2008). Self-presentation of personality: An agency-communion framework. In O. P. John, R. W. Robins, & L. A. Pervin (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research* (pp.492-517). New York: Guilford Press.

桜井茂男・大谷佳子（1997）．“自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究，*68*，179-186.

Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, *92*, 641-669.

Schlenker, B. R., & Weigold, M. F. (1992). Interpersonal processes involving impression regulation and management. *Annual Review of Psychology*, *43*, 133-168.

関谷大輝・湯川進太郎（2014）．感情労働尺度日本語版（ESL-J）の作成　感情心理学研究，*21*，169-180.

下斗米淳（2000）．友人関係の親密化過程における

満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究――役割期待と遂行とのズレからの検討 実験社会心理学研究，*40*，1-15.

菅原健介（1992）．対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究，*7*，19-28.

菅原健介（1998）．人はなぜ恥ずかしがるのか――羞恥と自己イメージの社会心理学 セレクション社会心理学　19　サイエンス社

谷口淳一・清水裕士（2017）．大学新入生の自己高揚的自己呈示が友人関係の形成と自尊心に及ぼす影響――APIM を用いたペア縦断データの分析　実験社会心理学研究，*56*，175-186.

寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人（1992）．多面的感情状態尺度の作成 心理学研究，*62*，350-356.

Vohs, K. D., Baumeister, R. F., & Ciarocco, N. J. (2005). Self-regulation and self-presentation: Regulatory resource depletion impairs impression management and effortful self-presentation depletes regulatory resources. *Journal of Personality and Social Psychology*, *88*, 632-657.

渡部敦子（2000）．対人恐怖心性の特徴――状況による分析および対人不安との比較　日本心理学会第64回大会発表論文集，85.

渡部敦子（2003）．対人不安と自己呈示――さまざまな対人場面における自己呈示動機付けと効力感について 東北大学大学院教育学研究科研究年報，*51*，187-196.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子（1992）．認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究，*30*，64-68.

Zapf, D. (2002). Emotion work and psychological well-being: A review of the literature and some conceptual considerations. *Human Resource Management Review*, *12*, 237-268.

（受稿４月27日：受理５月29日）